

4 まとめ

新潟大学人文学部考古学研究室では、群馬県伊勢崎市赤堀今井毒島城遺跡において2006年5月に測量調査、同年8月に発掘調査を実施した。その結果、同遺跡が中世城館跡として地元、伊勢崎市の指定史跡となっていることから、特段に慎重な調査が要請され、結果的に表土を剥ぐだけの調査に止まった。一部地層の堆積状況を判断するため、古墳時代の遺構覆土の可能性のある部分の必要最小限の小規模なサブトレンチを掘り下げたところ、榛名山二ツ岳噴出火山灰層と推定される厚さ2cmほどの薄層が連続的に南に傾斜しながら続いていることが確認された。その上部には人為的な盛り土とも推定される不自然な土層堆積が認められた。その中には、二次的な角閃石安山岩の軽石小粒子と僅かな土器片（土師器片）の混入が見られたが、その二次的な移動の時期を確定するまでには至らなかった。

また、当初目指した、古墳時代はもとより中世の遺構と積極的に判断される遺構は検出できなかった。ただし、土地所有者および耕作者からの聴き取りにより、中段部南側中央付近にあった井戸の周辺から出土したという中世石造物が畑の端に片づけられており、その現況写真撮影の後、二次的移動を確認してから調査・研究のために一時、大学の方に預からせていただいた。その後、中段部北側の畑でも耕作中に発見されたという五輪塔空風輪の存在を知り、同様に土地所有者の了解を得て研究室に運び込み調査・記録させていただいた。その結果、南と北の中段部から出土したという五輪塔は、それぞれ凝灰岩製空風輪1点、水輪1点、安山岩製火輪1点、水輪1点（以上、中段部南側）と安山岩製空風輪1点（中段部北側）というように整理された。これらは石材や出土位置、形式差などから本来の組合せとして同一個体に復元されるものではない。少なくとも2個体以上の複数の五輪塔の造立が推定され、しかも、空風輪の型式差から年代的に13～16世紀に及ぶ時間幅がうかがえる。

群馬県内の五輪塔の編年に関しては、磯部淳一氏による先行研究がある（磯部1992）。磯部氏は紀年銘をもつ五輪塔を基準資料として、その経年的な形態変化を地域性をも勘案しつつ空風輪・火輪・水輪において検討した。その成果を参考にすれば、中毛といえよう地域に位置する毒島城遺跡は、磯部氏が例示した東毛地域と西毛・北毛地域のほぼ中間に位置し微妙なところであるが、どちらかという東毛地域に近い。毒島城遺跡の凝灰岩製空風輪4はずんぐりとした形で、空輪と風輪の括れ部が不明瞭となっている。その特徴は東毛地域の南北朝期までの古式のものに類似する。一方、安山岩製の空風輪1は細身となり、縦に長い。また、空輪の先端が尖り、空輪と風輪の括れ部が明瞭となっている。その点、安山岩製のものには新しい傾向が認められる。火輪3は軒下の反りが無くなっているのが1400年以降の新しい傾向と言えよう。水輪2は扁平となっており、やはり新しい傾向である。磯部淳一氏によるデータ（磯部1992）を参考にすれば、表1の水輪の幅1に対する高さの割合を基準にすると、本資料2が0.658となっており、やや新しい。同様に、表2の水輪の上幅1に対する最大幅の割合では、本例2が1.557と中間の時期に相当する。表3の火輪の上幅1に対する下幅の割合では、本例3が0.91で、やはり中間の時期に位置付けられる。表4の火輪の上幅割合から下幅割合を引いた数では、本例3が0.047となり、おおかた1400年以前の古い様相といえる。表5の火輪の軒長1に対する屋だるみの割合では、本例が0.0597となり、どちらかという古い傾向が指摘できる。表6の空風輪の幅1に対する高さの割合では、本例の凝灰岩製のものが1.31、同じく安山岩製のものが1.69となり、前者が13～14世紀と古く、後者が1550年前後の新しい傾向を読み取ることができる。

発掘調査と事前の表面採集により確認された遺物には、古墳時代の土師器片、須恵器片、円筒埴輪片1、中世の常滑大甕片1、青磁片1、近世陶磁器片多数、近現代磁器片多数などがある。中世の遺物はごく少ないが、群馬県内の中世城館跡から出土する遺物の少ない

傾向が指摘されており、これをもって毒島城遺跡が中世に城館として使われていなかったとも即断できない。むしろ、現在遺された石造遺物より、一部は墓地として機能していたことが想定される。

地元土地改良事業の理事長を務めた中里吉松氏によれば、昭和22年（1947）の水害の折、毒島城遺跡の一部が崩れ、「元亨二年」（1322）銘の板碑が出土したという。残念ながら、現物は現存しないが、先の五輪塔などと性格的にも、年代的にも符合する遺物である。

測量調査の結果、頂部は南側に緩く傾斜する広い平坦面を有し、中段部に腰郭状の平坦面を回している（山崎1978）。現状で南と東・西に3箇所の登り口があるが、傾斜のためと本来の防御のためか、いずれも直進できない。南側の中段部、中央付近の道左側に先の井戸のあったという跡がある。北側には双瘤ラクダ状の2つの突出部がある。上段・下段両段とも斜面は急傾斜で、登るのは至難である。斜面部には石垣状の工作物は認められない。ただし、南側下段部斜面の一部に握り拳大の川原石のやや集積した部分があり、注目される。西側入り口部、下段部斜面には安山岩の巨石が露頭している。そこには石切のためか矢穴の跡がある。なお、頂部縁辺には土塁状の高まりは現状では見られない。

周囲の低地は、北から南に徐々に傾斜している。現在の土地利用は夏場は水田、春先は麦畑の二毛作となっているが、伝承では沼があったという。果たして、人工的な濠があったかどうかは、発掘調査やボーリング調査によらない限り不明である。

出土遺物のうち、円筒埴輪は南側下段部標柱付近で表面採集されたものである。外面調整斜めハケのち横ハケを施す。横ハケの種類、黒斑の有無は小破片なので不明である。総じて、付近の赤堀茶白山古墳出土埴輪に酷似する。埴輪片の確認はこれ1片のみなので、これをもって即断は差し控えざるを得ないが、毒島城遺跡の一角に古墳があったか、埴輪製作址があったかのいずれかであろう。南側中段部の中央やや東寄り、ナス畑の南縁に小円墳状の高まりがある。塚の可能性もあるが、注目される点である。

ちなみに、毒島城遺跡は、『上毛古墳綜覧』の「赤堀村第261号墳」に相当し、規模は「径540尺、高さ24尺」とされ、「埴輪破片」出土と記録されている（群馬懸 1938）。規模からみると、丘陵全体を古墳と見なしているようで、その考えは受け入れがたいが、埴輪に関する記載は気にかかる。

なお、頂部東区B'トレンチのサブトレンチ内東壁・南壁・北壁の土層剥離標本を作製した。（橋本）

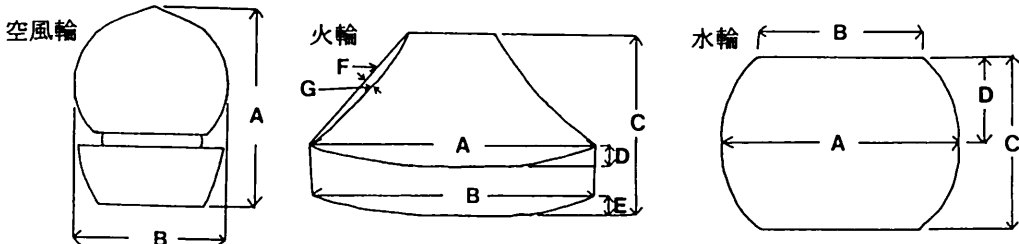


図9 五輪塔各部計測部位

表1 水輪の幅1に対する高さの割合

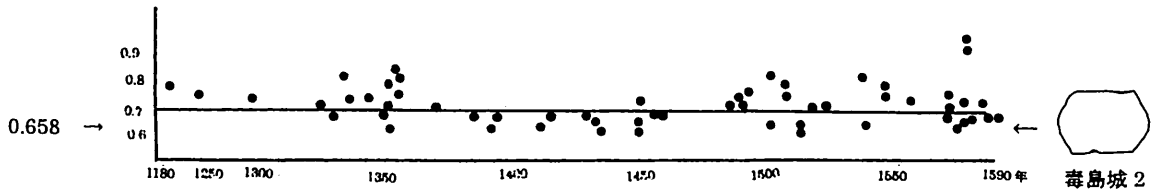


表2 水輪の上幅1に対する最大幅の割合

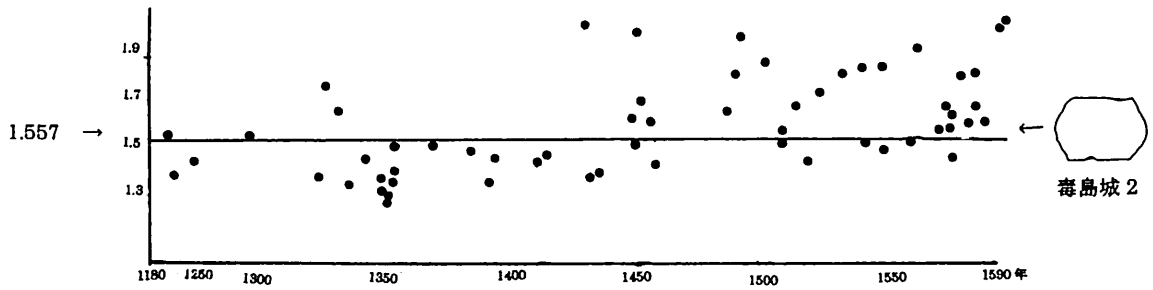
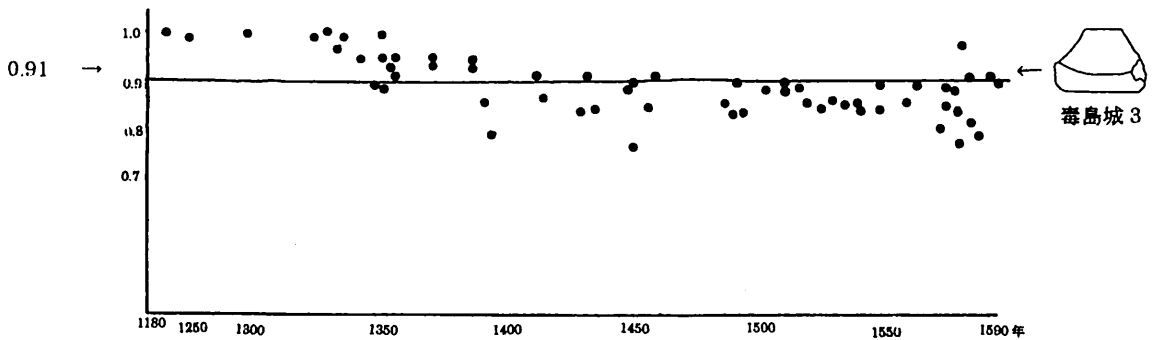


表3 水輪の上幅1に対する下幅の割合



毒島城遺跡発掘調査報告

表4 火輪の上幅割合から下幅割合を引いた数

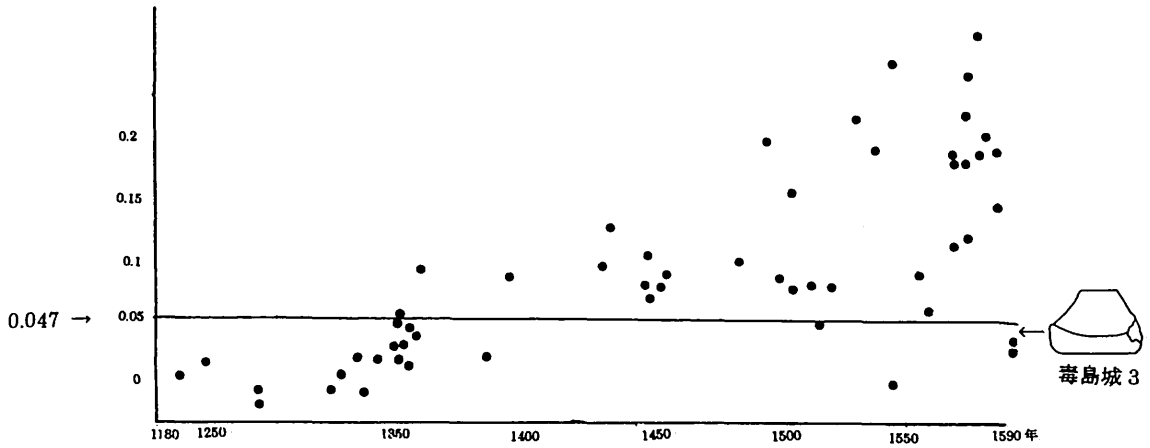


表5 火輪の軒長1に対する屋だるみの割合

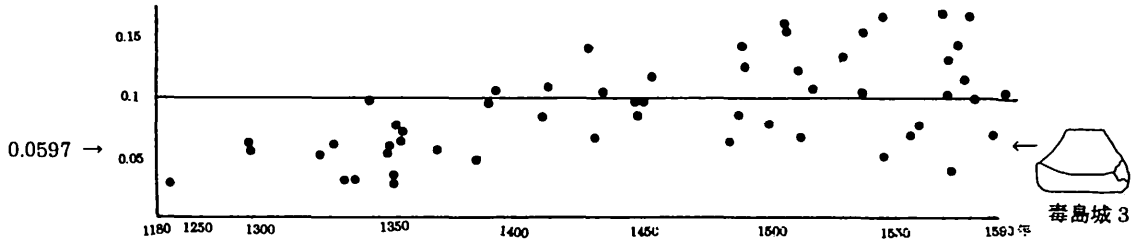
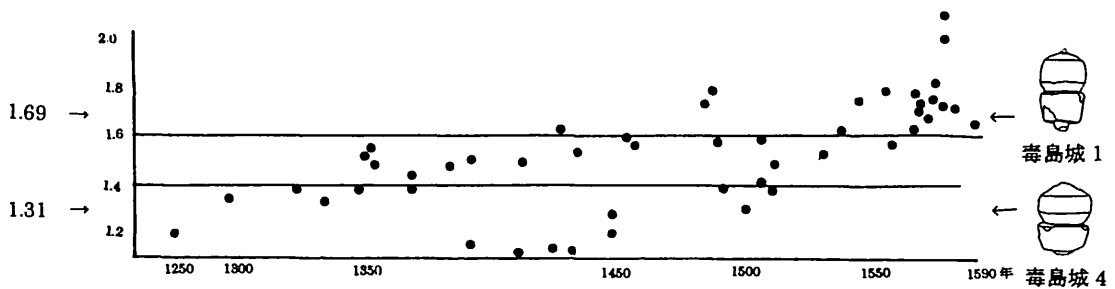


表6 空風輪の幅1に対する高さの割合



(磯部淳一 1992「群馬県における五輪塔の編年」『高崎市史研究』2をもとに作製)

おわりに

今後、毒島城遺跡の調査は、当遺跡が中世城館跡として市の指定史跡になっていることから、地元教育委員会とタイアップして進めていかななくてはならないだろう。また、地形・地質学、火山灰年代学、災害地質学などの自然科学分野との学際的な研究を推進していく必要がある。

本調査の遂行に当っては、以下の方々および諸機関のお世話になった。末筆ながら御礼申し上げたい。

伊勢崎市教育委員会、群馬県教育委員会、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、赤堀歴史民俗資料館、太田市教育委員会、技研測量設計株式会社、古環境研究所、共立印刷、大生開発、相川之英、阿部英顕、新船直孝、飯森康広、石坂 茂、石塚久則、石守 晃、稲垣泰一、梅澤重昭、大関允良、大塚富男、大西雅広、岡野幸男、女屋和志雄、小保方紀久、加部二生、川路 亨、川田 勇、甲 雅直、桐生敏正、久保田了次、桑野 徹、小池勝典、坂爪久純、澤口 宏、末高充良、須田悦司、須田由松、早田 勉、高橋浩一、田中隆明、中里吉松、中村 涉、半沢利江、前原 豊、松村一昭、右島和夫、水澤幸一、宮崎重雄、宮田 毅、村田喜久夫、茂木隆夫、茂木初雄、茂木 博、横澤敦子、横澤真一、横山智彦 (順不同・敬称略)

参考文献

- 磯部淳一 1992「群馬県における五輪塔の編年」『高崎市史研究』第2号 高崎市史編さん専門委員会 pp.33-58
- 群馬県 1938『上毛古墳綜覧』群馬県史蹟名勝天然紀年物調査報告書 第5輯 p.436
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004『群馬の遺跡6 古代』上毛新聞社
- 菅原雄一 2006「陶器窯跡群の地域差と技術拡散」『考古学研究』第53巻 第1号 考古学研究会 pp.47-67
- 田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店
- 前橋市教育委員会文化財保護課 2005『前橋市 大室古墳群』前橋市教育委員会・前橋市観光協会
- 水澤幸一 2004「頸城野における五輪塔の年代的位置付け」『上越市史研究』第10号 上越市史専門委員会 pp.31-43
- 山崎 一 1978『群馬県古城壘址の研究 上巻』群馬県文化事業振興会 p.311
- 山崎 一 1978『群馬県古城壘址の研究 下巻』群馬県文化事業振興会